

「ビキニの海からの証」上演によせて 〜ビキニ核被災を追跡する高校生たち〜

太平洋核被災支援センター事務局長

山下 正寿

1983年の夏に「幡多高校生ゼミナール」というサークルが高知県西部に生まれ、「足もとから平和と青春を見つめよう」と地域の現代史を発掘しはじめた。そして、1985年、広島・長崎の被爆40周年のこの年には地域の被爆者調査にとりくんでいた。「幡多高校生ゼミナール」の調査をビキニ事件の真相解明へと導いてくれたのが、藤井馬さんと息子の節弥さんだった。馬さんは節弥さんとともに長崎で被爆し、節弥さんはマグロ船員となり、太平洋の核実験に遭遇した。1960年8月2日、彼は神奈川県久里浜の入院先を抜け出し、入水し、27歳の命を絶った。

2023年に、幡多ゼミは結成40周年となり、OB会が開かれました。

高校生たちは、馬さんに代わって節弥さんとは、次々に被災漁船員を発見し、この巨大な事件にいとむむこととなった。高校生たちは幡多地域14漁村の聞き取り調査を行い、どの港にも被災漁船員がいることに驚いた。そして、室戸水産高校の高校生の白血病死を知り、室戸調査を重ねて、当時、被災した事実がタブー視されたことに疑問を抱いた。

平和の旅や、映画作りなど、高校生でもできることがあると体験でき、楽しい高校生活にしてくれた。

幡多高校生ゼミナールの高校生たちはビキニ事件の社会的背景、水爆実験と放射能など「知りたいから学ぶ」本物の学習を積み重ねて、後輩へと引き継いでいった。「学び、調査し、表現する」活動は、幡多地域から室戸、東京、焼津、広島、長崎、沖繩、韓国へと「平和の旅」を軸に広がり、社会に向けて潑刺とした意見表明を続けた。

自分は、高校が合っていないと、悩んでいた時期にゼミに出会った。おかげで居場所を見つけ、生き方や進路を考えることができた。

高校生たちは、馬さんに代わって節弥さんとは、次々に被災漁船員を発見し、この巨大な事件にいとむむこととなった。高校生たちは幡多地域14漁村の聞き取り調査を行い、どの港にも被災漁船員がいることに驚いた。そして、室戸水産高校の高校生の白血病死を知り、室戸調査を重ねて、当時、被災した事実がタブー視されたことに疑問を抱いた。

考え方の根底にあると思う。

私は中学で教員をしている、改めて当時の顧問の先生方のすごさを感じる。幡多ゼミでの自分の経験を、平和教育など自分の生徒に生かしていきたい。

などと言っていました。

劇団the・創によって、ビキニ事件の演劇が上演され、出会った被災船員や家族の方たちがよみがえることだろうと想像しています。40年前に、核被災に向き合った高校生たちがなぜ、どのような思いで活動したのか、そして今何をすべきかを共に考えていただければ幸いです。劇団の皆さん、ご支援いただいた皆さん、ありがとうございます。

などと言っていました。

劇団the・創によって、ビキニ事件の演劇が上演され、出会った被災船員や家族の方たちがよみがえることだろうと想像しています。40年前に、核被災に向き合った高校生たちがなぜ、どのような思いで活動したのか、そして今何をすべきかを共に考えていただければ幸いです。劇団の皆さん、ご支援いただいた皆さん、ありがとうございます。

ご来場の皆様、本日は誠にありがとうございます。ビキニ事件を演劇に……。その思いは4年の月日を経てやっと今実現されようとしています。

日常の営み、ビキニ沖でマグロを追っかけていた皆さんの船が操業中、なんの予告もなく水爆実験に遭遇し、たった1つしかない命、一度きりの人生が奪われてしまいました。

あつという間に命の灯を消された青年達！ ジワジワと長い間の内部被爆で苦しめられた命。その中でも懸命に生きようとした一人一人の命の証。その命の証を舞台として再現しました。地域の歴史を掘り起こしていた幡多高校生ゼミナールに結集する高校生と教師たちは高知のビキニ被災者がいる事実をつきとめました。語りた、いや語りたくない、でも知って欲しい、いや知らせなくては。事実を知りたい。その声に懸命に耳を傾ける人達。その声なき声を伝える活動は全国へと広がり被爆から70年を経て今、非核への願いは大きく高まっています。

ビキニ事件は終わっていない。核はいらない。一発の原水爆も許してはならない。皆さん、一緒に核のない未来に向かって歩き始めましょう!!

ご来場の皆様、本日は誠にありがとうございます。ビキニ事件を演劇に……。その思いは4年の月日を経てやっと今実現されようとしています。

御礼の言葉

劇団the・創

西森 良子

ご来場の皆様、本日は誠にありがとうございます。ビキニ事件を演劇に……。その思いは4年の月日を経てやっと今実現されようとしています。

日常の営み、ビキニ沖でマグロを追っかけていた皆さんの船が操業中、なんの予告もなく水爆実験に遭遇し、たった1つしかない命、一度きりの人生が奪われてしまいました。

あつという間に命の灯を消された青年達！ ジワジワと長い間の内部被爆で苦しめられた命。その中でも懸命に生きようとした一人一人の命の証。その命の証を舞台として再現しました。地域の歴史を掘り起こしていた幡多高校生ゼミナールに結集する高校生と教師たちは高知のビキニ被災者がいる事実をつきとめました。語りた、いや語りたくない、でも知って欲しい、いや知らせなくては。事実を知りたい。その声に懸命に耳を傾ける人達。その声なき声を伝える活動は全国へと広がり被爆から70年を経て今、非核への願いは大きく高まっています。

ビキニ事件は終わっていない。核はいらない。一発の原水爆も許してはならない。皆さん、一緒に核のない未来に向かって歩き始めましょう!!